

わが恩師

川崎医科大学 顧問 勝村 達喜

私の恩師は岡山大学第2外科の津田誠次教授、砂田輝武教授と岐阜大学第1外科の教授になられた稲田潔先生の3人をあげたい。

私が岡山大学を卒業した頃にはまだインターン制度があって、当時は全国の何処の指定病院においてもインターンを受けることが出来たが、有名病院はやはり希望者が多いため選抜試験が行われた。私は大阪の北野病院でインターンを行ったが、この病院は京都大学の大阪における大切な関連病院の1つであり、インターン生も京大出身者が殆んどだった。そして京都大学外科の青柳安誠教授が顧問として月に数回この病院にお出になっていた。青柳先生は本当に人格者で病院の全職員は勿論、インターン生全員も尊敬していた。先生はドイツ留学中の数々のエピソードやロマンスを、また外科の面白さも話して下さった。私は何時の間にか自分も外科医になろう、そして出来れば青柳先生に教を乞いたいと思う様になった。一緒にインターンをしていた同期生も「一緒に京大へ行こう」と誘ってくれたりしたものだから、或る時、青柳先生の教室で教を乞いたい旨、先生のもとに相談に訪れた。青柳先生は「君は岡山大学の出身だったね。君が若し将来郷里の近くに帰る意思があるのなら、私が最も尊敬する岡山の津田誠次先生の所へ行きなさい」と仰言って津田先生に紹介状を書いて下さった。インターンが終了して昭和32年、津田先生の所へ参り、青柳先生の紹介状をお渡しして理由を述べると、津田先生は「青柳君がそんな事を言ったのか」と涙を流さんばかり喜ばれた。

この津田先生とは鹿児島出身で第七高等学校造士館から東京大学医学部をご卒業になり32歳で岡山大学第二外科の教授にご就任になり、33

年間に亘り岡山大学第二外科の基礎を築かれ、後に岡山労災病院の初代院長に就任された津田誠次先生の事であり、川崎祐宣先生の七高造士館の先輩であり、岡山大の恩師である。なお後で聞いた話だが青柳先生も鹿児島、第七高等学校造士館のご出身で、津田先生の後輩だったとの事である。

津田先生は英国紳士の様な方で、真摯、端正、凜然、気骨、穏和、等々先生のご人格を形容する数多くの言葉がある。津田先生はお名前どおり誠実謹厳な方であったが、残念ながら昭和33年に定年退官され岡山労災病院の初代院長に就任された。私は津田先生ご退官後もお世話になったが、医学、医術よりも次元の高い、医の志操、倫理といった精神的な教をいただいた様に思う。

津田先生の後任には砂田輝武教授が就任された。砂田先生は剣道五段で、剣道の精神である「剣は誠なり」の心をたたきこまれた方であり、長い間津田先生に師事されたためか、津田先生以上に素朴で、物の考え方、人間としての生き方に「誠」を基調とされた。



Fig. 1. 津田教授

弟子が実験でよく動物を殺したり、思わぬ合併症で不幸にして亡くられる患者さんがあるので、教室の責任者として、その供養をかね四国八十八霊場参りを始められたのも、先生の偽りのない心、つつしみ深く、てらうことのないお心の現われと思っている。「病人を救ったのは手術ではなく、神の助けによる」というアンブラス・ベレの言葉が先生にあてはまると思っている。

砂田先生は明治45年生まれで私の父とは、丁度一回り年が違う子の年生まれであるためか、物の考え方や所作に信仰深かった私の父に似たところがあった。

私は砂田先生を恩師として16年間師事したが、砂田先生から懇切丁寧な御指導を受けたという印象は今も持っていない。手術中に先生に質問しても、先生は知らぬ顔で手術を進められるし、あまり口数多くは答えてもらえなかった。しかし先生の患者さんの心を心とした診療態度、ごまかしの全くない手術、しかも手術中はそれに全力を注入しておられたお姿は、今も私の脳裏に強く焼きつけられており、何時の日か先生の様な医者になりたいと思ったものである。

私は昭和32年から49年まで17年間にお二人の先生に師事したわけであるが、その間、何となく岡山大学第二外科教室の伝統というか、先生方の考え方というのか、ある得体の知れない空気のようなものが、私の体の中に、あるいは心

の中にしみ込んでしまったようである。私も人が人に接するとき、また物事に対処するとき、常に誠の心をもってありたいものと思う。特に医師は誠の心をもって患者の診療にあたらねばならない。誠をもって他に対する心は温かいヒューマニティに満ちた人間尊重の心といってよいが、そういう心が私の身につくのは何時の事であろうか。

もう1人、私の学問的、外科手技的な面での恩師に稲田潔先生が居られる。先生は砂田教授の助教授として昭和43年8月までお務めになり、岐阜大学第一外科教授にご就任になった。稲田先生は津田誠次先生の末のお嬢さんのご主人であり、名だたる学者の家系の出である。

昭和20年岡山大学のご卒業であるが、岡山一中4修、六高という秀才である。昭和20年代にフルブライト留学生として米国に留学されハーバード大学、マサチューセッツ総合病院において血管外科学の世界的権威であるリントン教授と友好を深められた。そしてご帰国後の先生のご活躍はめざましく、経腰の腹部大動脈造影法や血栓内膜剥離術などを日本で初めて実施され、その手技を普及された。先生の多岐にわたる血管外科のご業績の中で最も有名なものは大動脈炎症候群に関する研究である。多数の大動脈造影法実施例中に本症を見つけ、異型大動脈縮窄症と名付けて、日本における本症の存在を外国誌に初めて紹介された。その後本症に関する厚生省の研究班の班長として多角的な追究と



Fig. 2. 砂田教授



Fig. 3. 稲田教授

調査の成績をまとめて本症の全貌を明らかにされた研究報告書の評価はきわめて高い。さらにバージャー病に関しても、その独立性を主張され、その成因について新しい見解を公表され海外の注目を集められた。稲田先生が岐阜大学にご赴任が決まった昭和43年8月まで、私は先生から徹底的に教えを賜った。先生が執刀される手術の殆んど全症例に前立ち（第一助手）を努めさせていただき、徹底的に先生の手技を習得することが出来た。そしてその間、「自分が岐阜に行った後はまかすぞ」との先生のお気持ちが伝わってきた。稲田先生は岡山県下は勿論のこと、広島県など他県の病院の先生からも患者さんの紹介を受けておられたが、岐阜大学にご赴任の前にそれらの先生方に「自分が岐阜へ行った後は、勝村君に紹介して下さい」と言い残していただいた事を後で知って大変有難く思った。

以上述べた3人の先生には何時までも心に残るご恩を感じ、今日の自分があるのは先生方のお蔭であると感謝の気持ちで一杯の日を送っている。